

「ファームイン」契機に 新たな地域づくりの芽

ルポライター
滝川 康治



農村は、都市住民との交流や保養の場でもある。「グリーン・ツーリズム」の議論も盛ん。ファームイン（農村民宿）の動きが活発な十勝を歩く。

土に触れる体験ツアー

好天がつついた7月上旬、「有機農業の村」で知られる十勝の中札内村で、道内外の若い女性たちが参加して農業体験ツアーが行われた。「ファームイン十勝」と銘打ったこの催しを企画したのは、十勝地区農協青年部協議会（堀田信幸会長）の面々である。

2泊3日のツアーには、民泊や搾乳体験、大型トラクターやコンバインの試乗——といったプログラムが組まれた。そのなかに、訪問先の農場で野菜を収穫し、若い農家の主婦たちとともにサラダ料理を作る企画もある。

5戸でダイコンの生産組合をつくっている共和地区の川田忠さん（56）宅を訪れるコースに、わたしも同行した。



羊のいる風景が広がる「ヨークシャー・ファーム」(後方・新得町で)

伝統的な畑作物の価格が低迷するなか、この村でも野菜を手がける人が増えているとか。選果場ではダイコンの箱詰め作業が最盛期を迎えていた。

「今年からニンニクや木酢液を取り入れて、農業をなるべくかけないようにしています。皆さんだつて虫が食っていないのを選ぶでしょ。でも、本当はポツンポツンと虫食いの跡がある方がおいしいんだよ」

時きつけから出荷までの流れを紹介

中の宮崎県出身者

などと感想を述べて、部員たちから拍手喝采を浴びていたのを見ると、楽しみながら生産現場を理解するきっかけになったようである。

受け入れ窓口のJ・A中札内村青年部の杉江茂部長は、

「この時期、畑作は草取り作業くらいしかないんで、庭先で話を聞いてもらえるように企画してみました。農村の雰囲気を知ってもらえたらうし、独自の部員には、都会の女の子との接し方も学べたんじゃないかな」と振り返り、何らかの形でこうした活動を継続していこうとしていた。

ここ数年、農村を生産地としてだけでなく、都市住民との交流や保養の場としてもとらえ、地域の活性化を図っていくという機運が、静かな拡がりを見せている。農業と旅行との接点を見だし、新たな産業をつくろうとする試みは「グリーン・ツーリズム」と総称されるが、最近では農水省などもその普及に力を入れ始めた。

農業体験の受け入れ、果物の摘み取り農園、農家が民宿を経営する「ファ

しながら、川田さんが語りかける。畑に足を運び、ダイコンが脱皮する話や鮮度を保つために早朝から収穫する苦労話を披露すると、彼女たちは、「へえー、そうなんですか」「朝3時半から収穫するんですか!？」と感心するやら、ちよつと驚いたり。

都会の女性に農業を理解してもらい、部員たちが外に目を向ける場にしよう——というのが目的で、今年で3回目。参加者は20歳前後の学生やOL、公務

ームイン、旅行者が農家に分宿する「ファームステイ」、山村留学——など形態は多様だ。十勝の農協青年部の企画も、その一例なのである。

5年目のファームイン

国道38号線を北上し、新得町の市街地を過ぎてしばらくすると、右手に竹田英一さん（38）が経営する「ヨークシャー・ファーム」と羊の放牧場がある。レンガの外装があたりの緑に映える英国風の建物は、1階が40席のレストランで、2階が宿泊施設。脱サラで新規入植し、道内でも数少ないファームインを始めてから5年になる。

「大学を出るころに一生の仕事を考えて、自然のなかで動物と一緒に何か面白いことを——って、農的な生活をイメージしたんです」

大きな暖炉、テーブルには季節の花が飾られ、クラシック音楽が流れるレストランで、竹田さんが振り返る。

隣の清水町生まれで、母親の実家は農家を営んでいたとか。いきなり羊飼いや宿泊所をやっても失敗すると思ひ、人に使われる修業と貯金のために10年



川田さんからダイコン栽培の苦労話を聞く—中札内村



トラクターに試乗する企画も(同上)

員、近隣の町の農業実習生ら15人で、出身地は九州や関西、関東方面などさまざまな。交通費と2万円の参加費を自己負担してやってきた。

楽しんで現場を理解

「自腹を切ったので、期待しているんですよ。冷やか半分、観光がてらには、僕らの目的に反するからね。農村には閉鎖的な部分はまだあるんで、意識改革をして自ら外へ発信しなきゃならない時代ですよ。この催しも、一歩ずつ進んで5年、10年の積み重ねで形になっていけばいい」

と、堀田会長が力を込める。

参加者にツアーはどう映ったのだろうか。町外れの農村休暇村で開かれた懇親会のステージはトラックの荷台。マイクを握った彼女たちは、

「アスパラの生え方が分かって面白かったし、初めての搾乳は楽しかった」

（新聞を見て参加した京都の学生）

「畑は見えていたけれど、働いている人の苦労は分からなかった。収穫の大変さを知ったりして感動した。勉強になりました」（十勝支庁の職員）

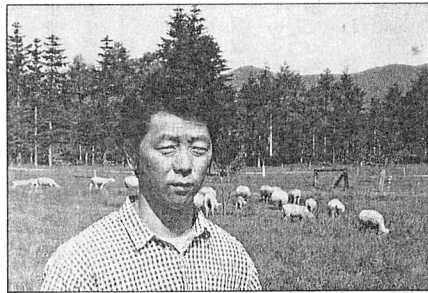
「帰ってから友だちに、『ぜひ十勝に行ってみて』と勧めます」（幕別町で実習

想を描いているのが特色といえる。

昨年、市の肝煎りで16戸の農家と市民有志が集まり、帯広ファームイン研究会（石田正美会長）が発足した。まずは国内外的実例を勉強したり、10戸を選んで会員たちがバスで回って見学し、住宅の環境整備について考えてきたという。年度内に「帯広型ファームイン」の方向をまとめる予定だ。

事務局を担当する市農林課主事の敦賀光裕さんの名刺には、「明日の農業を語りましょう」と刷り込んであり、熱意が伝わってくる。帯広は、平均耕地面積が24ヘクタールと広く、夏場は農作業に追われて手間のかかるやり方は難しいし、山間部と違って国の支援制度が適用されないのが、農家の気構えとお金がないと踏み切れないというの、敦賀さんの分析である。

「部屋と朝食だけを提供するB&Bスタイルか、もっと簡略化したものを、農村部のレストランや農業体験などつなげて、地域のバックアップ制度をつくりながらやっていきたい。建て替え時期を迎えたり、農地の交換分合に



新規入植でファームインを経営する竹田さん

ほど建築関係の仕事をやった。88年に9ヘクタールあまりの農地を得て新規入植し、「ヨークシャー・ファーム」を建てる。建設費は約4000万円。観光地でないだけにお客さんがきてくれるかどうか五里霧中で始めたが、口コミや旅行雑誌などに紹介されたりして利用客は増えてきた。

初めは道内の利用客がめだつたが、最近は関東、関西方面の人が中心。年間の宿泊者数は1500人ほどで、若い女性や夫婦、カップルが多いとか。羊に触れられるのが特色で、5月には羊毛刈り体験やバーベキュー、糸紡ぎ

で、数年後にはファームインを手がける農家が現れる可能性があります」と期待をかけ、支援策の底上げを図ろうとしている。

ある地区では、農産物の加工・販売所やサクランボ園の造成などを、ファームインと連動させようとの試みもあるとか。交流事業の延長線上に農家民宿を具体化させようとする帯広方式は、将来を期待できそうである。

農村ゾーンの支援を

道農政部農村計画課の調査結果だけを見ても、さまざまな形態で都市住民との滞在型の交流をめざす動きは30近くにのぼっており、その多くがファームインを念頭においている。

これらの支援策として、道は88年からさまざまな調査を続けてきた。

本年度からは、3カ年計画で「農村ホリデーの推進」を目的に8地区の事業を支援したり、農業団体や観光関係者、市町村などで構成する協議会づくりが進行中。年6回ほど通信も発行して、各地のパイプ役も果たす。

その事業費は450万円と、道が自



交流を深めた青年部員との懇親会(中札内村で)

などを織り込んだ「羊をめぐる冒険ツアー」をやっている。

バス・水洗トイレ付きの部屋は4室ある。わたしも体験宿泊したが、ツインルーム、1泊2食付きで8500円。内装は白系統でまとめ、窓からは羊の姿や民家、花壇などを望むことができ、落ちついた雰囲気が漂う。

これまでは助走期間だったが、来年は10室に増築し、自宅も清水町から引越して家族ぐるみで経営に携わる予定という。60頭ほどいる羊を200頭に増やし、食肉処理施設も併設して直販したり、レストランで提供したりす

るのが目下の目標である。

「それで初めて人に堂々と見えるんでしょうね。うちのような形は、普通の農家がやるには危険性がある。離れや古い家を利用したり、一家族でコーテージのように借りてもらおうとか、投資が少ない方法で手応えを見ながらやっていくといんじゃないですか」

と、夢中でやってきた5年間の経験を踏まえて、ファームインの可能性を語ってくれた。

昨年春、農民や喫茶店主ら20人ほどで「新得農村ホリデー研究会」を結成し、その事務局長でもある。例会では、ヨーロッパを訪れた人のスライドを見たり、富良野のファームイン経営主の話に耳を傾けたりしてきた。

町内には、これとは別に酪農家の主婦らによるファームインの研究会もあつて学習の輪が広がっているが、大規模リゾートの誘致に血道をあげてきた土地柄のせいも、町当局は住民たちの試みに関心が薄いようだ。

最近、竹田さんたちは町内で搾乳体験や花摘みのできる農場や喫茶店、温泉、野菜市などを紹介したガイドマップ

然破壊型の大規模リゾートに手を貸してきた罪深さに比べると、本当にささやかな金額である。が、手づくりリゾートを応援しようとする積極姿勢は評価されていいだろう。

同課地域計画係で農村ホリデー事業を担当する大久保昌子さんは昨年秋、英国の農家民宿に宿泊してきた。

「古くからの家に住んでいて、投資しなくても空き部屋を使って民宿をやっている。農家の奥さんも農作業にタッチしないので手軽にやれていました。北海道でそのままやるのは無理だと思う。そこを考えるのが原点かもしれないね」と、ヨーロッパで盛んな農家民宿と北海道の違いを指摘し、農家側がメニューを示して長続きするやり方を支援していきたい、という。

さまざまなファームインや交流事業の試みは、生産に追われて「嘆き節」ばかりが強調されがちな農業の殻を破り、誇りを持って農村の良さをアピールすることにもつながる。それを地域や行政がきちんと支えていくとき、面白くて活力のある本道農業の新局面が開けていくのだろう。

交流事業をベースに

ファームインへの試みを行政が熱心に支援するのが帯広市である。

5年前、東京の中学生の北海道体験学習（都教委主催）のために、市が58戸の受け入れ農家を探して歩いた。それをきっかけに独自のファームステイ導入に取り組み、91年には農家の登録制度を実施。反響を呼んで、9月には帯広農業をテーマに学習を重ねてきた神奈川県内の公立高校生90人が、2泊3日のファームステイに訪れるとか。これらと並行して、ファームインの構

「いろんな農家があると楽しいし、山麓の新得農業は条件が悪いので少しでも収入の助けになれば、と思うんですよ。旅行雑誌に新得の体験の旅が載ったりして、反響があるんです。これからは、時間をかけて農村の美しい景観をつくっていきたい」（竹田さん）

ファームインを孤立させるのではなく、住民たちの連帯感で潤いのある地域にしようとする試みが、わたしの目には新鮮に映った。